

認定心理士（心理調査）資格の発足にあたって

2013年10月、公益社団法人日本心理学会の常務理事会の開始前にサトウタツヤさんと雑談をしていたとき、突然サトウさんから「鈴木さん心理調査士のような資格を作ったらどうだろう」という話が出ました。当時総務担当をしていた私は二つ返事で「いいね。作ろうか。今日の常務会で話をしよう」。これが、「認定心理士（心理調査）」が産声をあげた瞬間でした。その後、集まりやすいからという理由で関西のメンバーを中心に本書の執筆者でワーキンググループを作り、検討を重ね、「心理調査士」という原案で、日本心理学会の理事会に提案し、了解をいただきました。ワーキンググループとしては心理調査士という名称にしたかったのですが、監督官庁である内閣府との数度にわたる折衝、また指導の結果、「認定心理士（心理調査）」という名称となりました。

皆さんご存知のように、2017年現在、国家資格である「公認心理師」が動き出しつつあります。公認心理師は、法律上汎用資格ということになっていますが、心理学の課程を終えた多くの卒業生が取ることのできる資格ではなく、原則として大学院への進学を必要とし、臨床・応用的傾向が色濃いものになっていくものと思われます。その他の心理学関連の資格には、公益法人認定資格、学会連合認定資格、学会認定資格など30ほどありますが、公益社団法人日本心理学会の認定している認定心理士と、一般社団法人日本心理学諸学会連合の行っている心理学検定を除き、その他の資格は臨床・応用に関するものです。認定心理士は、あくまでも大学などで心理学の課程を学んだことを証明する資格にすぎず、一部の人が誤解しているような職能資格ではありません。また、心理学検定は、心理学に関する机上の知識をもつことを示すものにすぎず、心理学の課程を修めたことを意味するものではありません。

大学の心理学の課程では、さまざまな心理学に関する専門科目はもちろん、心理学実験法や心理学統計法、そして心理学実験実習（あるいは演習）という科目が必修の基礎科目として設置されています。心理学の実験および調査では、物質科学のように $1+1=2$ というような結果は、多くの場合得られません。人間や動物を対象として扱う場合、教示の仕方一つで、また、接し方一つで結果が違ってきます。さらに、個人差が大きいこともご存知だと思います。つまり、

人間（動物）の場合、1+1 が2 になるとは限らないのです。心理学の課程では、こうした対象とする現象の特殊性や問題点、また個人差が結果に与える影響を身をもって体験することの重要性から、伝統的に実習を大事にしてきたのです。また、こうした物質科学とは異なる不確実性を担保するための技法として、心理学統計法や実験計画法あるいは心理学研究法などを開発し、それらの科目をほとんどすべての心理学課程を置く大学で必修にし、心理学生は物質科学と異なる人間科学の研究方法やノウハウを学んでいるのです。

しかしながら、先ほど述べたように、これまで心理学を学んだ学生が取得できる資格のほとんどは、臨床・応用に進む一部の学生・実践家のための資格しか存在していません。大学の心理学の課程で心理学実習や卒業論文などで実証的な心理学を学んだ大部分の学生が、その知識や技術を仕事に生かすことができる資格は存在していなかったのです。

そこでこのたび、公益社団法人日本心理学会は「認定心理士（心理調査）」の資格を制度化しました。この資格は、心理学を学んだ一般学生が、大学の心理学の課程で学んだ知識、技術を企業、官公庁、教育現場など様々な場面で生かすことのできることを目指した資格です。このため、この資格は、調査（実験）対象について、自分の力で、問題点を探り、目的を設定し、調査（あるいは実験）をする方法を計画し、実施し、得られた結果を解析し、考察することのできる能力を有することを求めています。またそういう能力をもっている人物であることを認定する資格です。こう言うと難しそうに聞こえるかもしれませんが、心理学課程で学ぶ皆さんが将来取り組む、あるいは現在取り組んでいる卒業論文をイメージしてください。認定心理士（心理調査）で求めているのは、卒業論文を書き上げるにあたって必要な事柄、能力ということなのです。

2017 年 2 月

編者を代表して
鈴木直人

執筆者紹介

執筆順、◎は編者

◎ サトウタツヤ (佐藤 達哉)

執筆担当：第 1 章

現職：立命館大学総合心理学部教授

主要著作・論文：『*Making of The Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology*』（共編著，Information Age Publishing，2016 年），『心理学の名著 30』（筑摩書房，2015 年），『TEM ではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究をめざして』（編著，誠信書房，2009 年）

◎ 鈴木直人 (すずき なおと)

執筆担当：第 2 章

現職：同志社大学心理学部教授

主要著作・論文：『心理学概論 [第 2 版]』（監修，ナカニシヤ出版，2014 年），『朝倉心理学講座 10 感情心理学』（編集，朝倉書店，2007 年），『感情心理学への招待——感情・情緒へのアプローチ』（共著，サイエンス社，2001 年）

三浦麻子 (みうら あさこ)

執筆担当：第 3 章

現職：関西学院大学文学部教授

主要著作・論文：『Survey satiscing inflates stereotypical responses in online experiment: The case of immigration study.』（共著，*Frontiers in Psychology*，7，2016 年），『社会心理学概論』（分担執筆，ナカニシヤ出版，2016 年），『人文・社会科学のためのテキストマイニング [改訂新版]』（共著，誠信書房，2014 年）

関口理久子 (せきぐち りくこ)

執筆担当：第 4 章

現職：関西大学社会学部教授

主要著作・論文：『やさしい Excel で心理学実験』（共著，培風館，2011 年），「感情調節尺度 (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成」（共著，『感情心理学研究』，20，2012 年）

小島康生 (こじま やすお)

執筆担当：第 5 章

現職：中京大学心理学部教授

主要著作・論文：『心理学概論』（分担執筆，ナカニシヤ出版，2016 年），『発達科学ハンドブック 4 発達の基盤——身体，認知，情動』（分担執筆，新曜社，2012 年），『朝倉心理学講座 3 発達心理学』（分担執筆，朝倉書店，2007 年）

川野 健治（かわの けんじ）

執筆担当：第 6 章

現職：立命館大学総合心理学部教授

主要著作・論文：『発達科学ハンドブック 7 災害・危機と人間』（分担執筆，新曜社，2013 年），『物語りと共約幻想』（共編著，新曜社，2014 年），『ディスコミュニケーションの心理学——ズレを生きる私たち』（分担執筆，東大出版会，2011 年）

秋山 学（あきやま まなぶ）

執筆担当：第 7 章

現職：神戸学院大学人文学部教授

主要著作・論文：『心理学概論 [第 2 版]』（分担執筆，ナカニシヤ出版，2014 年），『新・消費者理解のための心理学』（分担執筆，福村出版，2012 年），『よくわかる産業・組織心理学』（分担執筆，ミネルヴァ書房，2007 年）

田中 芳幸（たなか よしゆき）

執筆担当：第 8 章

現職：京都橘大学健康科学部准教授

主要著作・論文：The role of “ikiiki: psychological liveliness” in the relationship between stressors and stress responses among Japanese university students. (*Japanese Psychological Research*, **58**, 2016 年)，『認知心理学ハンドブック』（分担執筆，有斐閣，2013 年），『ストレスの科学と健康』（分担執筆，共立出版，2008 年），『知的障害者の健康管理マニュアル——身心ともに健康な成長・加齢のため』（分担執筆，診断と治療社，2007 年）

渡邊 卓也（わたなべ たくや）

執筆担当：第 9 章

現職：東京大学大学院医学系研究科・医学部特任助教

主要著作・論文：『社会と向き合う心理学』（分担執筆，新曜社，2012 年）

目 次

第 1 章 心理調査の基本的考え方と歴史	1
1 研究と調査，心理と社会，量的と質的	2
心理調査とは	2
心理調査のあり方	4
心理学における研究と調査	6
学範関心駆動と社会関心駆動	9
宣言的知識と手続的知識	10
変数という考え方	10
量的方法と質的方法	12
調査対象としての心理と社会	14
2 心理学の展開 ●心理調査の源流	14
心理学の展開	14
心理調査の源流	16
3 心理調査の実践 ●あるいはハルカの挑戦	20
架空事例：ハルカの挑戦の心理調査的側面	20
架空事例から学ぶこと：ハルカの調査の発展可能性	25
4 日本心理学会の認定心理士（心理調査）について	27
 第 2 章 心理統計の基礎	 29
1 なぜ，心理統計法が必要なのか	30
心理統計法とは	30
心理統計法のロジック	30
心理学の共通ルール：仮説演繹法	32
2 少数の部分でもって全体を推し量る	33
標本からの推定	33
分布上の位置から考える	36
3 集団の特性を推測，記述する ●記述統計	37
サンプリングの重要性	37
統計的検定の考え方	38
4 危険率（有意水準）について	39
統計的検定の落とし穴：2つのエラー	39
危険率はなぜ 5% なのか	40

5	仮説の検定	41
	2つ以上の母集団の特性の違いを比べる	41
	2つ以上の現象の関係を調べる	43
6	統計の使用上の注意	44
第3章	調 査	47
1	調査で何ができるか	48
	調 査 と は	48
	調査でできること	49
	心理調査と社会調査	51
2	調査票の作成	53
	調査計画の策定	53
	調査票作成時の留意点	53
3	対象者の選定	58
4	信頼性と妥当性	59
	信 頼 性	60
	妥 当 性	61
5	より進んだ調査に向けて	62
	ネット調査	62
	データアーカイブの利用	63
	追試研究・メタ分析	63
第4章	実 験	67
1	心理学における実験	68
	実 験 と は	68
	研究計画の流れ	68
	研究仮説の形成	69
	操作的定義	70
2	実験計画（デザイン）	70
	独立変数と従属変数	70
	実験参加者の割り当て方	72
	1 要因の実験計画	72
	多要因の実験計画	75
	単一事例実験	78
3	実験実施の準備	79

統 制	79	
測 度	80	
刺激の作成	81	
課題の作成	81	
心理実験における倫理	82	
4 実験の注意点		83
実験者の注意点	83	
統計的検定の注意点	83	
再現可能性	84	
結果の報告における注意点	85	
第5章 観 察		87
1 観察法とは		88
観察法の歴史	88	
数量化を目指す観察	89	
観察事態と観察者の立ち位置	89	
2 基本的な観察記録の方法と分析		91
全生起行動記録法	91	
時間見本法	92	
事象見本法	96	
3 その他の観察手続き ●参加観察法		99
4 洗練への工夫		102
さまざまな機器の利用	102	
他の調査方法との併用	103	
第6章 面 接		107
1 調査面接の特徴		108
調査面接とは何か	108	
相 互 交 流	109	
生活文脈の取り扱い	110	
2 調査面接の準備		113
調査面接の実施を決定する	113	
調査面接の協力者を選定する	114	
調査面接に必要な時間と費用を考える	116	
インタビューガイドを作る	118	
3 調査面接の実施		120

面接会で	120
質 問	120
4 面接データの分析	121
記録とデータの編集作業	121
データの分析	122
第7章 尺度構成	125
1 尺度構成とは何か	126
心理尺度と測定	126
心理調査における尺度の重要性	126
2 尺度の性質 ●測定のための4つの尺度	127
名義尺度	128
順序尺度	128
間隔尺度	129
比率尺度	130
3 知覚・感覚の測定と尺度構成	130
精神物理学的尺度構成法	130
間接尺度構成と直接尺度構成	131
多次元尺度構成法	134
4 評定尺度を用いた尺度構成	136
リッカート尺度による心理尺度構成	136
セマンティック・ディファレンシャル法による尺度構成	139
第8章 検 査	143
1 心理学における検査とは	144
はじめに	144
心理調査と心理検査	144
心理査定と心理検査	146
心理査定に関する理論モデル	147
2 さまざまな心理検査法	149
心理検査の分類	149
質問紙法	150
投映法	151
作業検査法	152
精神生理学的な方法への展望	154
3 心理検査の具体例	155

質問紙法の一例：矢田部ギルフォード性格検査	155
投映法の一例：文章完成テスト	155
作業検査法の一例：内田クレペリン精神作業検査	158
4 心理検査の科学性	159
心理検査の作成過程	159
標準化	161
第9章 実践と倫理	165
1 心理調査の実践	166
倫理規範の重要性	166
調査者の責務	167
調査計画の客観的評価	168
2 インフォームド・コンセント	169
基本的な説明事項	169
インフォームド・コンセントを受ける手続き	171
ディセプション	171
3 個人情報と調査データの管理	172
匿名化の方法	172
保管と廃棄	174
4 結果報告の倫理	175
公正な結果報告	175
最後に	176
引用・参考文献	179
事項索引	182
人名索引	187

Episode	産婦を救った調査 ●エビデンスの重要性	8
Episode	先入観をくつがえすフィールドワーク ●「お年玉」は誰にあげるもの？	13
Topic	学問の名称 ●××学とは	16
Topic	調査データの質を高める ●ネット回答者の「不注意」や「手抜き」を見抜く	64
Episode	行動観察という体験 ●サルの観察から QOL まで	104
Topic	アクティブインタビュー ●相互交流という視点	112
Topic	グループインタビュー ●情報源としての他者	115
Try	心理尺度の探し方と使い方	140
Topic	心理テストの罠 ●「当たっている」と感じるのはなぜ？	163
Try	よりよい説明文書を考える	176

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

表 1-2 認定心理士（心理調査）のスキーム

心理調査の基本的考え方	A項目	心理調査概論など
データ分析法	B項目	統計法など
データの取り扱いと報告	C項目	基礎実験実習など
問題設定・分析・報告	D項目	心理学特別研究、卒業研究（論文）など

（注）ただし心理学研究法（座学）はA項目に含むものとする。

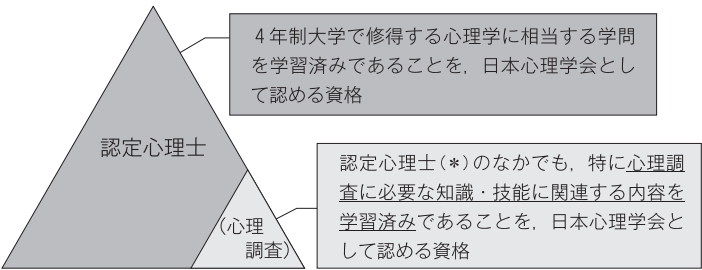


図 1-3 認定心理士（心理調査）資格の位置づけ

認定心理士（心理調査）はあくまでも学習内容を担保するものであり職能資格ではないが、きわめて職能資格に近い資格として位置づける。そのため、大学において卒業論文などの単位取得を強く求めている。

＊ 2014 年基準改定以降の基準を満たした認定心理士でなければならない。

1 なぜ、心理統計法が必要なのか

心理統計法とは

心理統計法と社会統計法はともに応用統計学の一種である。両者の違いを簡単に表すと、国勢調査や意識調査、世論調査などの比較的多くの人々を対象として行われた調査において用いられるのが社会統計法であり、そのデータから社会全体の特徴、傾向などを知ることができる。特に国勢調査のように非常に多くの対象者に行う調査の場合、得られた条件間の違いは、そのまま条件間の違いと見なすことができる。つまり社会統計は、集団のデータから個人を見ているともいえる。

一方、心理統計法を用いる場合、一般にデータを得る対象者が少なく、得られた結果から、その対象者が属する集団全体の結果を推測し、その推測にもとづいて集団を比較する。後で述べるように、その人が属する集団全員からデータを得ることは困難なことが多い。心理統計法のメリットは、実験計画法（第4章参照）にもとづいて計画された実験や調査の結果、得られたデータから全体の結果を推測することを可能にするという点にある。心理調査（実験などを含む）はいわば個人のデータから集団を見ているといえることができる。このため、人間の行動に関わるさまざまな条件の実験、調査に関する、変数間の関係に関する仮説の統計的検定などが可能となる。

心理統計法のロジック

心理学は人の営みすべてに関わる学問であるといっても過言ではない。その対象は、ニューロン（神経細胞）を扱ったものから、文化人類学的な領域まできわめて広範囲にわたる。また、そこで観察される現象はいわゆる物質科学での現象と同じ基準では測ることができないことが多い。たとえば、重さの異なる2つの^{おもり}錘をどの順番で秤に載せても重さは変わらないが、心理現象の場合、先に重いものを持ったか、軽いものを持ったか、見かけが白いか、黒いかなどによって、同じ重さでも異なると感じられる。よく言われる表現だと物質科学のように $1 + 1$ が2であるとは限らず、3になったり、1になったりすることがある。さらに酸素と水素が化合すれば必ず水ができるといったようにつねに決まった反応が生じるとは

限らないのが心理現象なのである。つまり心理現象は人や動物を対象とした現象であるため、その個体の置かれた環境の違いや遺伝的要素の違い、成育歴などによって個人差（個体差）が存在する。このため昔ガリレオ（Galilei, Galileo, ユリウス歴 1564–グレゴリオ歴 1642）は、心理的な現象は、色や音などの感覚を通してでしか測定できない第2属性に関する現象であり、長さや重さのような直接測定できる第1属性のように科学の対象とはならないと主張した。

このような特徴をもつ心理現象をいかに客観的に測定し、法則化するか、心理学の歴史はその手法の開発の歴史であったといえることができる。ある条件下の実験や調査の結果、得られたものがデータである。データには、多くの人、あるいは個体から集めたものもあれば、ある個人（個体）から何度も繰り返し収集したものもある。またこうして集められたデータには、知能指数や学業成績のように量的なもの、すなわち定量化できるものもあれば、企業名や Yes/No の反応ように質的なもの、すなわち数値として扱うことができず、定量化できないものもある。定量化できないデータは、ある条件のデータとある条件のデータを比べることができないわけではないが、定量化できるものに比べ、通常その結論に客観性をもたせることは難しい。一方、定量化することができる心理現象は、さまざまな条件下で得られたデータを比較することを可能にするだけでなく、データの統計的処理や実験や調査結果の再現可能性（第4章参照）、客観性という意味においても非常に大きな利点をもつ。このため、さまざまな心理現象をいかに測定し、数値化するか、その方法の開発に力が注がれてきた。

このようにして得られた実験結果が、科学的な根拠にもとづくものとして多くの人に受け入れられるためには、その現象の公共性、普遍性、客観性、再現可能性などを担保するなんらかの方策が必要になる。心理学が統計法を重要視する理由の1つは、この担保をその現象が起きる確率でもって充足しようとするところにある。統計的な確率を用いるということは、 $1 + 1 = 2$ のように答えは1つではなく、生起確率は低いが3や4になることもあることを仮定する。つまり、心理学はそこで示した1つの心理学的法則には例外が存在することを認めたうえで、その法則は95%以上の場合通用するが、5%以下の確率で間違っている可能性があるという結論の出し方をする。このようにある心理的現象の起こる確率を求め、統計的な確率分布と比較し、それにもとづいて結論を出

1 心理学における実験

実験とは

心理学の実験とは、人の特定の行動や心の働きを規定する要因（原因）は何かをあらかじめ仮定し、その仮定にもとづいて規定要因を具体的に操作し、その行動に変化があるかどうかの効果（結果）を検証する、つまり因果関係を検証する方法である。実験は、行動の規定要因をかなり単純化し、意図的にその規定要因を操作し、その効果を客観的に測定できるので、因果関係の明らかな知識を得ることができる。しかし、その一方で、日常場面での実施は難しく、特別に実験室や実験場面を用意する必要がある。

研究計画の流れ

心理学の研究計画では、まず研究のテーマ、すなわち、「何を研究するのか」という問題の設定が必要である。実験を計画する際にもまず問題を設定することから始める。たとえば、日常生活のなかの偶然の観察や予備の観察から「どのようなメカニズムで起きているのか」「どのような要因が行動に影響を与えるのか」などを探究したい、あるいは、人の心理や行動傾向を知り社会的な問題に対処する方策を考えたいなどが問題設定の始まりとなる。次に、何を研究したいかが確認できたら、同じような研究テーマの先行研究を調べるとよい。実験を行っている論文を読むのも大事だが、やりたい研究テーマについてまとめたレビューを読み、レビューに引用されている文献を自分で探して読むことでテーマを掘り下げることができる。そのような作業を経て、先行研究の結果をもとに、さらに研究を発展させる、あるいは、反証するための**実験計画**（または**実験デザイン**〔experimental design〕第2節に詳述）を立てる。

問題の確認ができれば、次は具体的に実験の計画を進めていく段階である（図4-1）。実験計画の流れをまとめると、研究仮説を設定（次項参照）し、実験計画を準備し（第2節参照）、実験を実施する（第3節参照）。実施後は、得られた実験の結果から、統計的検定を行い、仮説を検証する（第4節参照）。そして、最後に実験の結果をレポートや論文にまとめて報告する。

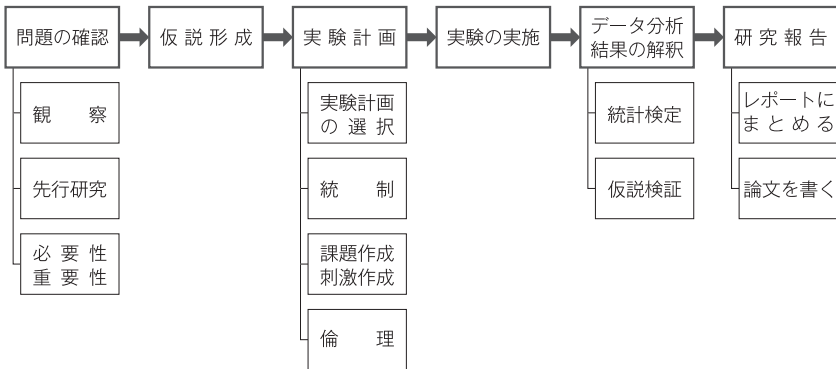


図 4-1 研究計画の流れ

研究仮説の形成

上述したように、実験では行動の規定要因について仮定してそれを検証するが、この際の仮定が**仮説**である。仮説とは、「この行動はこのようなことが原因で起きているのではないか」という仮の説明のことである。実験では必ず仮説を立て、その仮説を検証するための実験を行い、実験の結果により仮説が支持できるかどうかを考察する。

仮説には、**反証可能性**（falsifiability）があることが大切である。反証可能性とは、これから検証しようとする仮説が、測定結果や事例によって否定または反論できる可能性があることである。反証可能性のない簡単な例をあげると、以下のような場合が考えられる。

- 仮説 1 「明日は雨が降るか、降らないかのどちらかである」
→ 明日は必ずどちらかの場合になるので反証可能性がない
- 仮説 2 「大学に合格できたのは神様のおかげである」
→ 神様の存在は証明できないので仮説の検証が不可能であり、反証可能性がない
- 仮説 3 「異常行動は、その人が子どものときの精神的トラウマが原因である」
→ 異常行動の原因となりうるものが多すぎて特定が困難であり、仮説の検証が事実上不可能であり、反証可能性がない

仮説 1 や仮説 2 はわかりやすい例なので反証可能性がないことは明らかだが、心理学において仮説 3 のような事例は少なからずあるので、仮説を立てるとき

Topic

アクティブインタビュー

●相互交流という視点

アクティブインタビューとは、調査面接の技法の集合体を指すものではなく、インタビュー「理論」、もしくは1つの視点のことである。

Holstein & Gubrium (1995 山田他訳 2004) は、インタビュー（本稿では調査面接のこと）では、面接者と調査協力者とのアクティブな相互行為が展開していると主張している。このアクティブという表現には、積極的にという意味に加えて、今ここで作り上げる、という意味が含まれている。

調査協力者が質問に答えることについて、「(自分の心のなかの) 情報の貯蔵庫を利用する」という比喻を用いてみよう。従来の調査面接をこの比喻で捉えと、調査協力者が使う情報の貯蔵庫は、回答の容器に喩えられる。つまり、調査協力者はその容器からなかのもの（情報）を取り出して報告している。一方、アクティブインタビューでは、情報の貯蔵庫とは、「多様で、多面的な、つねに生成しつつある」ものであり、それを「アクティブに選択して、さらにストーリーを組み立てて」話していると考えるのである。

面接者もまた、調査協力者と協同して回答をアクティブに構築する。被災地の面接で、調査協力者が「直接、津波で家屋や家族が無事だった私たちは、『人前』で震災の話をしないようにしている」という話を聞いたとする。面接者はこのまま話を聞き続けることもできる。しかしここで、「では、被害がないことがわかって人どうしでは、どんな話になりますか」と質問すれば、調査協力者は異なる立場（話を聞くだけの人→自ら話す人）から語ることになるだろう。あるいは、面接者がそれまでに被災地に入り、さまざまな経験をしていれば、そこで得た背景知を利用して「今、復興商店街で震災直後の写真展をやっていますけど、どう思いますか」と具体的に質問することで語りを誘発することもできる。つまり「情報をアクティブに選択し組み立てる」ことを、これらの質問で活性化するのである。

このような多様な相互行為によって生み出される語りを分析する際には、意味を作り出すプロセスが、語られた意味そのものと同じくらい重視される。アクティブインタビューでは語られた内容と同様に、面接という相互行為自体が研究の対象になる。

事項索引

● アルファベット

ANOVA (analysis of variance) →分散分析法
F 分布 35
 IRB (institutional review bound) →施設内審査委員会
 JND (just notifiable difference) →丁度可知差異
N = 1 実験 →単一事例実験
p 値 83
 REC (research ethics committee) →倫理審査委員会
 SCT (sentence completion test) →文章完成テスト
 SD 法 →セマンティック・ディファレンシャル法
 TAT (thematic apperception test) →主題統覚検査
 Type-I error →第一種の過誤
 Type-II error →第二種の過誤
t 分布 35
 YG 性格検査 →矢田部ギルフォード性格検査
z 得点 (標準化得点) 35
 χ^2 (カイ二乗) 分布 37

● あ 行

アクティブインタビュー 112
 関 132
 絶対—— 132
 弁別—— 17, 132
 一対比較法 132
 因果関係 49
 因子 137
 因子分析 137
 確認的—— 138
 インタビューガイド 118

インフォームド・アセント 171
 インフォームド・コンセント 169
 ウェクスラー式知能検査 153
 内田クレペリン精神作業検査 158
 横断調査 50
 オプトアウト 171
 オープンクエスション 5

● か 行

回帰分析 44
 改ざん 175
 カウンターバランス →均衡化
 確証バイアス 164
 学範 (ディシプリン) 3
 ——関心駆動型 9
 確率分布 31
 学力検査 149
 仮説 53, 69
 研究—— 70
 統計的—— 38, 70
 仮説演繹法 32
 仮説検定 41-43
 片側検定 41
 カットオフ値 →基準値
 カップパ計数 95
 カテゴリー 123
 ——分析 123
 感覚量 131
 観察事態 90
 観察者の立ち位置 90, 100
 観察法 88
 完全な関与による観察 90
 完全無作為化計画 72
 危険率 (有意水準) 39-41, 83
 基準値 (カットオフ値) 161
 期待値 36
 帰無仮説 38, 70, 83

- 客観性 88, 91, 167
- キャリアオーバー効果 56, 62, 118
- 共変関係 50
- 虚偽検出検査 154
- 均衡化 (カウンターバランス) 79
- 偶然誤差 → 標本誤差
- 繰り返し測定計画 73
- グループインタビュー (フォーカスグループ
インタビュー) 115
- クローズドクエスション 5, 110
- クロンバックの α 係数 61, 138
- 計数測定 80
- 結果変数 → 従属変数
- 検定力 45
 - 分析 45
- 現場 (フィールド) 22, 100
- 効果量 45, 83
- 交互作用 77
 - 1 次の—— 78
 - 2 次の—— 78
- 構成概念 61, 127
- 構造化面接 110
 - 半—— 110
- 行動カテゴリ (行動目録) 89, 95
- 行動観察 104, 150
- 行動目録 → 行動カテゴリ
- 行動論モデル 148
- 交絡 71
- 個体追跡観察 91
- 国家研究法 168
- コモン・ルール 168
- 混合計画 (分割プロット要因計画) 75
- 参加者内計画 72, 75
- 参加者内変数 72
- 散布図 18, 43
- サンプル → 標本
- 視角 81
- 時間見本法 92
- シークエンス分析 124
- 自己開示 157
- 事象見本法 (場面見本法) 96
- 施設内審査委員会 (IRB) 168
- 自然観察 89
- 悉皆調査 → 全数調査
- 実験観察 89
- 実験計画 (実験デザイン) 68
 - 1 要因の—— 72
 - 多要因の—— 75
- 実験者効果 83
- 実験デザイン → 実験計画
- 質的研究 21, 144
- 質問紙法 127, 150
- 社会関心駆動型 9
- 社会調査 30, 51, 160
- 社会的望ましさ 51
- 尺度 126
 - 間隔—— 129
 - 順序—— 128
 - 比率—— 130
 - 名義—— 128
- 尺度構成 (法) 126
 - 間接—— 131
 - 精神物理学的—— 131
 - 直接—— 131
- 自由記述法 → 全生起行動記録法
- 従属変数 (結果変数) 11, 32, 72
- 縦断調査 50
- 主効果 77
- 主題統覚検査 (TAT) 152
- 順序効果 80
- 剰余変数 (二次変数) 71
- 人格検査 150

● さ 行

- 再現可能性 84
- 再検査法 60
- 作業検査法 153
- 参加観察法 99-102
- 参加者間計画 72, 75
- 参加者間変数 72

心身相関 154
 信頼性 59, 95, 113, 138
 ——係数 61
 心理学的測定 144
 心理検査 144, 161
 心理査定 146
 心理尺度 52, 126
 心理調査 2, 51
 心理的距離 135
 心理統計法 30
 水準 71
 性格検査 152
 生活年齢 153
 生活文脈 111
 正規分布 34, 154
 標準—— 35
 精神診断論モデル 148
 精神生理学 154
 精神測定論モデル 148
 精神年齢 153
 精神物理学 15, 131
 精神物理学の尺度 131
 精神物理量関数 131
 生体機能論モデル 148
 生理指標 80, 154
 生理心理学 154
 折半法 60
 説明文書 169
 説明変数 →独立変数
 セマンティック・ディファレンシャル法
 (SD法) 139
 宣言の知識 10
 全数調査(悉皆調査) 37, 58
 全生起行動記録法(自由記述法) 91
 相関関係 18, 43, 137
 相関係数 43
 相互交流 109, 113
 操作の定義 70, 94
 測定誤差 53
 測度 80

組織的観察法 88

● た 行

第一種の過誤(Type-I error) 40
 第二種の過誤(Type-II error) 40
 代表値 37
 対立仮説 38, 42, 70
 多次元尺度構成法 134
 妥当性 59, 138, 161
 基準関連—— 61
 構成概念—— 61, 139
 併存的—— 61, 138
 予測的—— 61
 ダブルバーレル 55, 118
 多変量解析 44, 137
 単一参加者実験 →単一事例実験
 単一事例実験(N=1実験; 単一参加者実験) 78
 単極尺度 140
 単純一致率 95
 チェックシート(データシート) 92
 知能検査 19, 153
 知能指数 153
 中立性 167
 調査 48
 調査面接 108
 調整法 17
 丁度可知差異(JND) 17, 132
 追試研究 63, 84
 デイセプション 172
 テキストマイニング 123
 データ 15, 31
 データアーカイブ 63
 データシート →チェックシート
 手続的知識 10
 点観察法 92
 同意書 171
 投映技法 →投映法
 投映法(投映技法) 151
 統計的検定 83, 138

統制 79
盗用 175
独立変数（説明変数） 11, 32, 70
度数分布図 36
努力の最小限化 64

● な 行

内的整合性 61, 138, 155
二次変数 → 剰余変数
日誌法 88
認定心理士（心理調査） 2, 27, 41, 48, 52
捏造 4, 85, 175
ネット調査 62, 171
ノンパラメトリック統計法 33

● は 行

媒介変数 32
バウムテスト 155
恥知らずの折衷主義 22
バーナム効果 → フォアラール効果
場面設定法（場面想定法） 150
場面想定法 → 場面設定法
場面見本法 → 事象見本法
パラメトリック統計法 33
反証可能性 69
反応形態 149
反応時間 80
反応潜時 80
反応頻度 80
非関与的な観察 90
ビネー式知能検査 153
標準化 35, 161
標準化得点 → z 得点
標準偏差 34-36, 129, 154
評定尺度 127, 136
評定量 80
標本（サンプル） 33, 58
標本誤差（偶然誤差） 36
標本調査 58
分厚い記述 22

フィールドエントリー 100
フィールドノーツ 101
フィールドワーク 13, 21, 114
フェイスシート 56
フェヒナーの法則 17
フォアラール効果（バーナム効果） 164
フォーカスグループインタビュー → グルー
インタビュー

不正 3, 175
プライバシー 81, 120, 174
プライバシーポリシー 57
ブラインド法（盲検法） 83
単一—— 83
二重—— 83
ブロック化 73
プロトコル 122
分散 37, 129
不偏—— 36
母—— 34, 42
分散分析法（ANOVA） 78
文章完成テスト（SCT） 156
平行テスト法 60
ベースライン 78
偏差 IQ 153
変数 10, 32, 52
母集団 33, 42, 58
ポリグラフ 154

● ま 行

マグニチュード推定法 134
マッチング 79
無作為抽出（ランダムサンプリング） 33,
52, 116
メタ分析 63
面接者トレーニング 117
盲検法 → ブラインド法

● や 行

矢田部ギルフォード性格検査（YG 性格検査） 155

有意確率 83
有意水準 →危険率
有意抽出 59, 116
要因 70
要因計画 75
 完全無作為化—— 75
 分割プロット—— →混合計画
 乱塊—— 75
予備観察 91
予備調査 57, 116

● ら 行

乱塊法 72
ランダムサンプリング →無作為抽出

リッカート尺度 136
両側検定 41
両極尺度 140
臨床面接 109
倫理審査 49, 117, 168
 ——委員会 (REC) 168
倫理的配慮 166
連結可能匿名化 172
連結不可能匿名化 173
ロールシャッハテスト 152

● わ 行

ワーディング 54, 118, 141
ワン・ゼロ法 92

人名索引

● あ 行

- ウェーバー (E. H. Weber) 16, 17, 132
内田勇三郎 158
ヴント (W. M. Wundt) 14, 15, 19
エビングハウス (H. Ebbinghaus) 156
オスグッド (C. E. Osgood) 140

● か 行

- ガリレオ (Galilei, Galileo) 31
ギアツ (C. Geertz) 22
キャテル (J. M. Cattell) 16, 19
ギルフォード (J. P. Guilford) 155
クレッチマー (E. Kretschmer) 157
クレペリン (E. Kraepelin) 158
ゴルトン (F. Galton) 16, 18

● さ 行

- サーストーン (L. L. Thurstone) 132, 135
佐藤郁哉 22
サトルズ (G. D. Suttles) 22
佐野勝男 156
シュナイドマン (E. S. Shneidman) 152
スキナー (B. F. Skinner) 25
ゼンメルヴァイス (I. F. Semmelweis) 8

● た 行

- ダーウィン (C. R. Darwin) 88
辻岡美延 155

● な 行

- ニュートン (I. Newton) 6, 7, 26

● は 行

- ピアソン (K. Pearson) 18
ビネー (A. Binet) 16, 19, 153
フェヒナー (G. T. Fechner) 15-17, 132
フォアラー (B. Forer) 163
フック (R. Hooke) 26
フロイト (S. Freud) 151
ホール (G. S. Hall) 15, 16, 19, 20

● ま 行

- 元良勇次郎 15, 16, 20

● や 行

- 矢田部達郎 155

● わ 行

- ワトソン (J. B. Watson) 6



心理調査の基礎

——心理学方法論を社会で活用するために

First step to Research Psychologist

2017 年 4 月 20 日 初版第 1 刷発行

監修者 公益社団法人
日本心理学会

編者 サトウタツヤ
鈴木直人

発行者 江草貞治

発行所 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 3264-1315 [編集]

(03) 3265-6811 [営業]

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷 精文堂印刷株式会社

製本 牧製本印刷株式会社

© 2017, The Japanese Psychological Association / T. Sato &
N. Suzuki. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります

ISBN 978-4-641-17428-3

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。